



〈連載〉

「積ん読」の本棚から【4】(最終回)

こんな本どうですか？

山本良一

私がこのコーナーを担当してこれが4回目であつ最終回となる。今回は英語に関する本を2冊取り上げる。

◎『アメリカの小学校教科書で英語を学ぶ』(小坂貴志+小坂洋子 著, ベレ出版, 2005.7)

本書の著者はアメリカで学び、働き、子育てをした夫婦である。息子さんの哲平君が通った小学校の様子、チャータースクールで教鞭を執った洋子氏の経験など、生きた情報を交えながらアメリカの小学校や教科書の内容を紹介してくれる本である。

序章ではアメリカの小学校について概観する。制度、教科、年間行事、日課などを取り上げている。日課に関してちょっと驚いたのは、10:30からの10分休みにめいめいのスナックを食べることと、昼食の後にも各自「本日のスナック」を食べることである。

続くPart 1からPart 5にかけて、教科ごと(社会、理科、算数、国語、その他)に教科書や授業風景を紹介する。各トピックとも、まず実際の教科書などが示される。中には問題が付されているものもあり、考えながら読めるようになっている。次に日本語で同じ内容が記されるが、これは各トピック冒頭のキーワード、付録CDと相俟って英語学習の一助となる。

社会では、紹介されている教材のほとんどが3年生から5年生(最上学年)のものだが、1年生の教材が2つある。Pledge of AllegianceとNational Anthemである。3年生の学習内容の「ネイティブアメリカンのコスチュームを作ろう」と「歴史小説プロジェクト」は興味深い。前者にはベストや羽根飾りの作り方が、後者には読んだ歴史小説のポスターかジオ

ラマを作る課題が示されている。5年生の「マヤ文明」では、教室での教師と生徒のやりとりを載せている。教師の一方的な講義ではなく、生徒の考えを引き出しながら進めるのが印象的である。マヤ文明が減んだ理由を生徒に問うと、「宇宙人による誘拐」や「ガン」のような珍答も出るが、教師がうまくさばいている。英語教師としてoral introductionの参考になる。

理科も大半が3年生から5年生の教材である。中でも、人体のセクションは、語句を埋めながら読む／聞くことができ非常に面白かった。分泌液はjuiceとも言えることなど勉強になった。再生可能エネルギーのセクションの最後に「段落の第1文にトピックセンテンスが多い」という文章構成に関する指摘があるが、これは英語の読解・作文に役立つものである。

算数では、九九の歌に感激し、歌ってみたが、少々歌いづらかった。図形の名前や表現なども役に立つ。

あとは、紙面の都合で取り上げないが、ひとつだけ。給食のメニューが載っているが、さすがアメリカ。肉中心の食事が多いなあと改めて感じた次第である。

本書は米国学校事情の名著『アメリカ小・中・高校教育マニュアル』(花田・股野共著, 日本経済新聞社, 1993.5)にも比肩できる書である。内容的にバランスがよく、実体験も交えてある。そして何と言っても明快で構成のしっかりした英文が最大の魅力である。

◎『英語ライティングルールブック』(デイヴィッド・セイン 著, DHC, 2004.4)

前掲の本に見られるような明快な文章を書くのは、non-nativeの我々には無理としても、少しでも近づ

きたい。そんな人にもってこいの本が本書である。

序章、文法、語法、句読法、アメリカ英語とイギリス英語、資料という構成で、全体を通して、目的に合った正しい文章を書くことを目指している。

序章の中で印象的だったのは、ネイティブチェックが不可能な場合のチェック法である。「とりあえず(中略)2パターンを作っておいて、何時間かたつたあと、あるいは翌日にそれらの文章を冷静に眺めてみるのである」。これは早速実行したい。

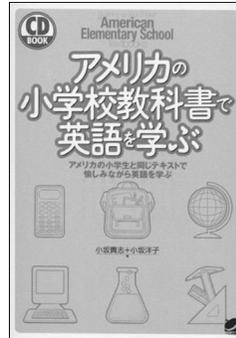
文法編にも参考になることが多い。不定詞と動名詞、法助動詞、未来表現、現在形と現在進行形など、従来の学校で間違っただけで教えられてきたことを正確に説明している。たとえば、will と be going to が異なることを示す例として、電話に出るときに I'll answer it. は言えるが、I'm going to answer it. は電話が鳴ることがわかっているような感じで不自然だとする。

語法の説明もわかりやすい。たとえば、過去になしたことを could で表現する生徒が多いが、著者は I was able to finish on time. はいいが、I could finish on time. とすると、「私ならできるのに」という仮定法の意味になると言う。should と need to と had better の使い分けなども納得がいく。

語法の中には差別的表現と PC 表現もあり、不適切な表現と適切な表現のリストが挙がっている。mailman は mail carrier, fisherman は angler など。その他、手紙などのフォーマルな表現とカジュアルな表現もまわっていてわかりやすい。

本書の一大特徴は、句読法にページ数を一番多く割いている点である。ライティングのテキストには必ず punctuation が載っているが、見開き2ページくらいの軽い扱いである。が、本書では80ページ近くを割き、諸記号、イタリック、大文字、インデントなど、誤用法と正用法の例を出して丁寧に説明してくれる。記号に関しては、前後のスペースの数に言及するなど、かゆいところに手が届く配慮である。私自身、20年近く前に担当した英文タイプの授業で、「ピリオドのあとは2スペースだ」と教えたが、今は1スペースでもよいと知った。

英米の英語の相違もわかりやすい。文法の例を挙げると、米では It's gotten so cold と gotten を用



アメリカの小学校教科書で英語を学ぶ

—アメリカの小学生と同じテキストで楽しみながら英語を学ぶ
小坂真志/小坂洋子 著
2005. 7, ベレ出版
本体価格 1,800円

英語ライティングルールブック

—正しく伝えるための文法・語法・句読法
デイヴィッド・セイン 著
2004. 4, DHC
本体価格 1,600円



いるが、英では got を使う。また、英で He has just gone out. と現在完了を使うが、米では He just went out. と過去形で表す。これまで何冊もの本で知ったことが1箇所にとまっていたありがたい。他にもつづりや語彙など、豊富な例は辞書としても使える。

優れた本書にも、物足りない部分がある。たとえば、受動態が使われるのは「動作主が一般の人々である場合、動作主が自明である場合、…」と分類しているが、文脈の中で態を選択する視点がない。例もすべて単文である。時制の一致も文脈が設定されておらず、また現時点からの時制の選択という視点もない。Joe said, “I saw John ... last night.” を Joe said he had seen John ... the night before. と書きかえるだけ。この文が Joe の発言と同じ日のうちにされたものなら、Joe said he had seen (saw) John ... last night. と言うはずだ。とは言うものの、全体を通して優れた参考書であることに変わりはない。

おわりに

本連載のおかげで、積ん読の本棚の本もかなり日の目を見た。今後、再び積ん読が始まるか、それともこれを機に脱出できるか、いま私は分岐点に立っている。

最後に、読者諸氏、特に感想などをお寄せいただいた方々にこの場を借りてお礼申し上げます。またどこかでお会いしましょう。

(やまもと りょういち・筑波大学附属高等学校教諭)